

## 談話室



### 随想 吉田先生の講演を聴いて

「自己の誤りを認めることを『冒虐』などと言って拒否するのは『冒卑』」

虎長（昭39卒）

昨今、老齡化が顕著なのはクラシック・コンサートの聴衆層と反戦・平和運動に関わっている世代である。

後者の解決になるか分からないが、若い人たちの目を戦争に向けさせるという意味で、吉田裕先生の著書『冒軍兵士』は画期的である。若い人が読み易い様に、簡潔な文体に心がけ、読者の身近に感じさせるために身体の問題を重視されたとのこと。

次代に伝える」という、先生の使命感に感銘を受けた。従来の吉田先生の著作の固定読者層でない分野の読者、すなわち若年層と、更に現代につながるブラック体質」を読み取る層が多いそ

うだ。14万部というベストセラーになったのは、中公新書編集者の辣腕にも依るが、先生の誠意が万人に通じたのではないかと感じた。

今回の講演では、『冒軍兵士』で触れてなかつたことの補足として、日中戦争とアジア・太平洋戦争との関係が説かれた。これは大変良かったと思う。

今の日本人が苦渋をもって振り返る『あの戦争』は、日米戦争に絞られがちである。来国による石油禁輸が日米戦争になった」と言う人がいるが、それは日本の中国政策に対する米国による制裁だったことを見逃してはならない。

更に満州事変まで考慮に入れ、鶴見俊輔の造語である『15年戦争』を総括すべきだろう。日本の国家予算に占める軍事費は、アジア・太平洋戦争末期の90%超だけでなく、すでに日清戦争期92%、日露戦争期82.3%という異常な高さだ。

日露戦争後から、特に昭和期に日本がおかしくなった」とは司馬遼太郎の見方だが、日清戦争から、日本は途を誤つていたと思う。明治期でも日露戦争批判があつたことは知られているが、勝海舟のような、日清戦争批判者もい

ただ。

今回の講演に続く茶話会で先生が指摘されたことで同感できたのは、近年、明治憲法への評価が高まっているが、明治憲法が、日本が誤つた方向に向かつた要因になっていないかの検討が必要」ということだ。

明治維新150年の今年、明治の偉業」を讃える動きと、雄藩独裁による負の遺産」を指摘する動きがある。

明治憲法については、あれしかなかつた」との説もあるが、植木枝盛の草案のように現日本国憲法に似た案もあつたではないか。これに先行する民主的な五日市憲法草案には、2013年に天皇・皇后が感動され、特に皇后陛下は絶賛しておられる。それにつけても残念なのは、今年の戦没者追悼式で安倍首相は『反省』『謝罪』をまたも表明しなかつたことだ。天皇陛下はいつも通り、『反省』に言及されたのに、である。

僕は今年6月の本欄の随想で、自分の国を無条件に賛美するのではなく、むしろ自分の国の欠陥をはつきりと自覚し、これを克服することによって、自分の国をいっそう高めていこうとするのが、真の愛国心である」との家永三郎の言葉を引用したが、今回は、より頑固

な保守派だった林健太郎の言葉を引用したい。自己の誤りを認めることを『冒虐』などと言って拒否するのは『冒卑』、すなわち自己を卑しめかえつて自己を傷つけるものであることを忘れてはならない。」

以上



吉田 裕名譽教授のお話

老苑

歴史はドラマであり、吉田先生の口述は、やや低めで淡々とした語り口であるが、滑舌宜しく、明瞭で聞き取り易いことと、話の内容、切り口は地味ながら、誘い込まれる表現力があり、多彩であり飽きることがなかつた。



# 『一橋人からの陣中消息』 如水会員の日中戦争』 (米濱泰英著)

本著書の4編の概要を紹介したい。

○ 盧溝橋事件から20日後、北京郊外の通州で、日本人居留民二百数十名が中国の保安隊によって虐殺された。(通州事件) 同盟通信の如水会員、安藤利男は取材中に捕まった。広場に集められた日本人は一斉に銃殺された。安藤は咄嗟に城壁を跳び越え逃走、その後も絶体絶命の追跡をかわし、裸同然で3日間に及ぶ逃避行の末生還した。

○ 昭和5年卒の棚橋順一歩兵中尉は、南昌攻略戦の中40名の手兵を率いて渡しを守ること3週間、大軍に包囲され最後は殲滅された。部下の信頼厚く、アララギ派歌人として歌壇で活躍した彼は、包囲の中、次の歌を詠み遺

書を残していた。

衆敵に取り囲まれし壕の外に紫雲英(レンゲソウ)の花は咲きひろがり」

はかなかりしわが世なれども賜りし情はふかく忘れがたしも」

萩子殿 母上と基の将来を頼む。棚橋

○ 戦地の元端艇部員は、昭和13年9月の「関東学生レガッタ」の戦績を気にしていた。商大がエイト、フオアを共に制覇した。

第3師団の森弥太郎は、武漢攻略後、同期会への通信で「最近知って一人祝杯を上げました」と書いている。

○ 戦前、戦後に母校で教鞭を執った村松祐次は、満洲東北奥地の虎林に出征。

ここには対ソ戦に備えて、長大な虎頭要塞が建設され、関東軍に「第4国境守備隊」が編成された。この部隊から村松は上田学長等へ2通の手紙を出した。

本書では、当時の如水会・平生理事長自らの陣中見舞状に応じ、戦場より会報に寄せた消息や、往時の戦史を入

念に調べ伏字の所属部隊名や進駐足跡まで根気強く追跡している。読み進むうちに、中国の戦場が身近に感じられ、そこが死と隣り合わせであることを思うと、実に胸が切なくなる。この米濱氏(43経、元岩波書店)が、戦没先輩に捧げた323頁の自費出版、新三木会の皆様には千五百円で頒布される。

是非「二説をお勧めしたい。

申込先 04・7184・6228

○九〇・五七九五・四二五一

オーラルヒストリー企画」

米濱泰英

増田洋作(昭和11卒)から昭5会宛てた葉書

諸兄は健在と存じます。

自分も御蔭にて野戦第一線にて

元氣一杯邦家の為奮闘して居ます

土民の小男児が煙草を喫し

兵の残した残飯を前掛けに入れて

むさぼる姿は益々如実に支那の

生活を物語り吾等に或物を教へ

ます。

諸兄の健康を祈りつつ

十二月二十六日 洋作写

